

トラークル研究

第六号

2009年10月

トラークル協会

〒271-8587 千葉県松戸市栄町西2-870-1 日本大学松戸歯学部独語研究室気付
Tel 047-360-9308 Eメール saegusa.kouichi@nihon-u.ac.jp

ゲオルク・ハイムの詩における blau

—トラークルとの比較において

三枝 絃一

序

ゲオルク・ハイムの詩における色彩語の使用は、トラークルに比べてみれば、その数において少ないと言えるが、他の詩人、例えばゲーテ、ヘルダーリン、ハイネ、リルケ等と比較すれば圧倒的と言うほど多い。ドイツの詩人に限って言えば、色彩語の使用は、トラークルに次ぐ。その意味でトラークルほどではないにしても色彩に重きを置いていると同時に色彩語を意識的に使用している詩人と言える。この小論は、ドイツ文学においてトラークルに次いで色彩語を、また blau を多用しているハイムのこの色彩語の使用の仕方を中心に据え、トラークルのそれとを比較することによって、ハイムのその特徴を明らかにし、ひいてはトラークルのその特徴を浮き彫りにしようとする試みである。

1. 数量的考察

ハイムとトラークルの詩における色彩形容詞の使用数を比較すると次の表のようになる。

ハイム	トラークル
1. schwarz 248 (22.2)	1. schwarz 208 (18.1)
2. weiß 215 (19.3)	2. blau 193 (16.8)
3. rot 141 (12.6)	3. weiß 112 (9.7)
4. golden 110 (9.9)	4. golden 111 (9.6)
5. blau 109 (9.8)	5. rot 105 (9.1)
6. grau 98 (8.8)	6. purpurn 94 (8.2)
7. grün 83 (7.4)	7. braun 88 (7.6)
8. gelb 58 (5.2)	8. silbern 78 (6.8)
9. braun 37 (3.3)	9. grün 59 (5.1)
10. purpurn 8 (0.7)	10. rosig 38 (3.3)

11. silbern	7 (0.6)	11. grau	34 (3.0)
12. rosig	2 (0.2)	12. gelb	32 (2.8)
総数	1116 (100.0)		1152 (100.0)
詩の総数	1054		694
色彩形容詞の一つの詩における平均頻度			
	1.06		1.66
blau の一つの詩における平均頻度			
	0.10		0.28

(ハイムの詩の総数は、DS.Iにおける詩、トラークルの詩の総数は、HKA.Iにおける詩の数であり、共に稿体を含む)

上の統計からハイムとトラークルの色彩語の数量的使用の特徴が読み取れる。先ずトラークルの色彩形容詞はほぼ満遍なく使われているのに対し、ハイムのそれは偏りがある。それは purpurn、silbern、rosig の三語の使用が極端に少ない点である。次に最も使用されている語は、双方とも schwarz であるが、トラークルの場合、他の blau を含む語、例えば Blau、Bläue、bläulich 等を計算に入れば 266 語に達し (ハイムの場合は 146 語)、schwarz に他の schwarz を含む語を足した数 244 語を上回る。ハイムの場合、blau は第 5 位に留まり、blau の全ての色彩形容詞に占める割合に関しては、ハイムの 9.8% に対して、トラークルは 16.8% にも上り、更に一つの詩当たりの blau の頻度はトラークルはハイムの 2.8 倍にも達する。ハイムの詩は、トラークルに比べてその頻度は低く、数量的にもトラークルは「青の詩人」と言っても差し支えないと思われる。

2. ハイムの詩における色彩語

ハイムの色彩への傾倒は大なるものがある。ハイム自身色彩について、その日記に次のように記している。

Ich habe jetzt für Farben einen geradezu wahnsinnigen Sinn. Ich sehe ein Beet mit einer Menge roter Stauden und darüber einen tiefblauen kühlen Herbsthimmel und fühle mich maßlos entzückt. (DS. III. S.144)

これを見ると色彩にいかにも喜びを感じてことが分かる。

またタイトルが色彩だけの詩もある。

Blau. Weiss. Grün.

In grünen Wiesen steht ein kleiner Hain
Von weißen Birken, die zum Lichte steigen.
Das erste Hellgrün auf den schwanken Zweigen —
Wie eine Wolke, wie ein Haar so fein.

Die weißen Wolken wachsen in die Luft
Wie Berge grundlos aus dem Blau der Seen.
In Licht gelöst die waldgen Ufer stehen,
Wo dämmrig ruht des Schattens blauer Duft. (DS.I. S.62)

このように色彩がタイトルとして掲げられていることは、先ずいかに色彩に重きが置かれているかを窺わせる。この詩において色彩が示されている語句は「緑の草原」、「白樺」、「淡い緑の芽」、「白雲」、「湖の青」、「影なす青い靄」であり、三色、つまり grün、weiß、blau がそれぞれ二つずつ使用されている。この数的なバランスとその配置と構成 (grün—weiß—Hellgrün—weiß—Blau—blau) に詩人の意識的な配慮が窺われる。色彩の所属している対象よりもそれらの色彩そのものが独立してタイトルに示されていることは、色彩がモチーフを超えてテーマになっていることを裏書きしている。これに対してトラークルの詩には、色彩そのものがタイトルをなしている例は無い。ハイムは色彩を絵画と同じように詩の基本的な構成要素として見ていたことが窺われる。ただこの詩の場合、初期の詩に属し、色彩語とこれが冠せられる名詞との結びつきは常套的である。

また『Der Blinde (盲人)』という詩では、盲人がいろいろな物が見られないことを嘆く詩であるが、

Die toten Augen. > O, wo ist er, wie
Ist denn der Himmel? Und wo ist sein Blau?
O Blau, was bist du? Stets nur weich und rauh
Fühlt meine Hand, doch eine Farbe nie. (DS.I. S.150)

と先ず盲人が色彩(空の青)を挙げ、これが見えないことを嘆く。これも詩人が色彩にいかにかに喜びを見出しているかの証左である。

またハイムの詩の中には、トラークルの詩よりも色彩語が多く使用されている詩もある。『Gegen Norden (北方へ)』(DS.I. S.111) は 20 行からなる詩であるが、11 個の色彩語が使用されている。このように色彩語が集約的に使われている詩がある一方、他方ではほと

んど使用されていない詩も多い。トラークルのように多くの詩にはほぼ満遍なく色彩語が使用されていないのもハイムの詩の一つの特徴をなしている。

3. blau、Blau、Bläue の使用の特徴

ハイムの初期の詩においては、blau は憧憬の色彩として主に使用されているのが特徴的である。

Ich steh auf der Spitze des Turms,
Der Qualm und Lärm der Gasse bleibt zurück,
Weit hinten seh ich meine Heimatsberge blauen,
Wenn in die Ferne schweift mein Blick. 『Lied des Gefangenen (囚われたもの歌) (DS.I. S.523)』

Wie glänzend die Höhen sich dehnen
Weit in die blaue Ferne.
Zu ihnen fliegt mein Sehnen
Hin zu dem Morgensterne. 『Sehnsucht (憧れ) (DS.I. S.533)』

blau は Berge や Ferne に関係し、実際その色は青いのであるが、同時にここでは憧憬の思いが込められ、象徴的価値を有している。しかしそれは常套的な結び付き方と言ってよい。特に die blaue Ferne は既成の雅語であり、「はるかな遠方」の意である。したがってこの blau は詩において使い古されたメタファーである。これに対してトラークルの場合このような結びつきは皆無である。ちなみに最初の例の blauen は、他の詩においては脚韻を合わせるため後置されている例も見受けられるが、この詩は脚韻を踏んでいないことから Heimatberge の付加語形容詞として後置したのではなく動詞と取るのが妥当であろう。

次に blau が所属すべき対象から分離し、名詞化された Blau であるが、これはハイムに 27 例、トラークルに 21 例ある。ハイムの場合 1906 年 10 月に成立した詩『Der Wald (森)』に初めて名詞の Blau が現れる。

Über herbstlich bunten Forsten
Frei die Falken und die Weihe.

Ruhig schweben sie, im Blauen (DS.I. S.633)

この Blauen は blauen Himmel のことであり、Himmel が省かれ、b を大文字化したものと考えられる。したがって空の青と容易に特定出来る。

Blau はこの時期、「空」の青を最も多く示している、その他、「海」、「湖」、「山」のそれと特定できる場合が多い。このような印象主義的な Blau は後期になっても見られる。

Sich mit Blau gefüllt, 『Träumerei in Hellblau (ライトブルーの夢想)』 (DS.I. S.337)

これはトラークルの印象主義時代の詩『Die schöne Stadt (美しい町)』の表現と類似している。

Tief in Blau und Gold versponnen (HKA.I. S.23)

トラークルの Blau は初期の段階では、ハイムと同じように空のそれを示す場合が多い。

・・・ Die Wolken stehn

Im klaren Blau, die weißen, zarten. 『ミラベルの音楽 (Musik in Mirabell)』 (HKA.I. S.18)

しかし後期になると、その所属を特定できない Blau が多数現れる。

In kühlen Zimmern ohne Sinn

Modert Gerät, mit knöchernen Händen

Tastet im Blau nach Märchen

Unheilige Kindheit, 『煉獄 (Vorhölle)』 (HKA.I. S.132)

ハイムの場合は、やや曖昧な例も見られるが、ほとんどその所属が明らかである。

Das ungeheure Blau des Himmels trägt.『Vom Grund der Schlucht... (峡谷の底から・・・)』 (DS.I. S.74)

このような blau の所属する具体が示される例は、トラークルの場合ほとんどない。

Ein Vogel fliegt, des goldner Ruf erschallt,

Da hoch im Blauen ihn das Licht erreicht, 『Der Frühling (春)』 (DS.I. S.245)

Blauen は前行によって空の青であることが分かる。

次に Bläue は、トラークルの場合、25 例見られるのに対して、ハイムの場合 3 例しかない。

Einsames Lied auf deiner Bläue fort, 『An das Meer (大洋に捧ぐ)』(DS.I. S.318)

Durch klaren Morgen und Wintertag

Mit seiner Bläue, wo wie Rosenduft

Von gelben Rosen, über Feld und Hag

Die Sonne wiegt in träumerischer Luft. 『Die Heimat der Toten (死者たちの故郷)』

(DS.I. S.209)

In das fröhliche Licht voller Bläue hinein. 『Die Irren (狂った者たち)』(DS.I. S.449)

最初の例は、deiner が das Meer への呼びかけであるので Bläue が大洋の青を示しているのは明確である。次の例はおそらく seiner が Wintertag を指しており、そうすると冬の空の青を示していることになる。これに対して三番目の例は、その帰属性は曖昧である。

これに対してトラークルのその使用は多彩である。現実的、具体的な例として眼の青みを示すのが 2 例、空の青を示すのが 1 例、暗喩として母の死の嘆きを示すのが 1 例ある。また独立的で抽象的あるいは象徴的な例として、聖なる (heilig) なものとの結び付きが 2 例、湿り (feucht) との結び付きがやはり 2 例、等が特徴的である。

4. blau の個別的結びつき

blau がどのような名詞に冠せられているかを考察する。

先ずハイムの場合、多い順に列挙すると、Mondlicht (月の光)、Abend (夕べ)、Licht (光)、Meer (大洋) が各 3 例、Schein (明かり)、Traube (葡萄)、Ferne (遠方)、Tag (昼)、Helmbusch (前立て)、Flut (潮)、Auge (眼)、Glanz (輝き)、Zunge (舌)、Pracht (華麗)、Glorienschein (光輪)、Sturm des Lichtes (光の嵐) が各 2 例である。

これに対してトラークルの場合、多い順に列挙すると、Wild (獣) 11 例、Blume (花) 10 例、Quelle (泉) 9 例、Wasser (水) 8 例、Stille (静寂) 8 例、Mantel (マント) 6 例、Lid (瞼) 5 例、Abend (夕べ)、Aster (アスター) が各 4、Fluß (川)、Tier (動物)、Schatten (影)、Glocke (鐘)、Luft (空気)、Felsenquelle (岩の泉)、Höhle (洞窟)、Auge (眼)、Taube (鳩) が各 3 例となっている。

これを見ると、ハイムの **blau** の絶対数が少ないからでもあるが、同じ結びつきが少ない。しかし光に関するものとの結びつきが多いと言える。総計すると、**Mondlicht**、**Licht** 各 3 例、**Glanz**、**Glorienschein**、**Schein**、**Sturm des Licht** 各 2 例、その他 **Feuer** (火)、**Ampellicht** (交通信号灯)、**Glut** (灼熱)、**des Lichtes Woge** (光の大波)、**Flammenschwall** (光の洪水) 各 1 例があるので 19 例の多きに上る。これに対してトラークルの光に関するものは、**Glanz** の 2 例のみであり、非常に対照的である。

トラークルの **blau** は、水に関わるものが多いと言える。**Quelle** 9 例、**Wasser** 8 例、**Fluß**、**Felsenquelle** 各 3 例、その他 **Teich** (池) が 2 例、**Antlitz des Teichs** (池の面)、**Wassers blaue Regung** (水の動き)、**Eis** (氷)、**Woge des Gletschers** (氷河の波)、**See** (湖)、**Lachen des Quells** (泉の笑い)、**Klage des Wildbachs** (野の川の嘆き)、**Firne** (氷河)、**Bach** (小川)、**Woge des Quells** (泉の波) 各 1 例で都合 35 例に及ぶ。これに対してハイムの水に関するものは、**Meer** が 4 例、**Flut** が 2 例、**Wasser** (水)、**Woge** (大波) 各 1 例の 6 例のみである。

ハイムの **blau** の多くが光に関するものに結び付き、トラークルのその多くが水に関するものに結び付くことは、前者の詩の特徴がドライであり、後者のそれがウエットであることを象徴的に示していないであろうか。

ハイムとトラークルの場合一般に、頻出する **blau** の冠せられた名詞が一致するものは少ないと言える。特にトラークルの上位 3 位の **Wild**、**Blume**、**Quelle** はハイムには一例もない。したがってこれら 3 例はトラークル文学の特徴を示していると言える。その中でもとりわけ **blau** がメタファーとして使用され、象徴性の高い **blaues Wild** がそれを裏書きしている。また次の **blaue Blume** もノヴァーリスの影響も考えられるが、ロマン主義の流れをくむと言えるトラークル文学を象徴する指標と考えられる。このように共通する例は少ないが、唯一例外として **Abend** がハイムの 3 例、トラークルの 4 例が目立つ。その他共通するのは **Auge** (眼)、**Glanz** (輝き)、**Wasser** (水)、**Finsternis** (闇)、**Lid** (瞼)、**Wind** (風)、**Atem** (息) である。

次にハイムとトラークルが **blau** をポジティブあるいはネガティブに使用しているかの問題であるが、トラークルの場合は、それはポジティブな関連の中でも、ネガティブなそれにおいても使用されている。いずれにせよ、それが本来持つ価値を、更にはその潜在的可能性を十分に引き出すためにポジティブかネガティブは問われない。

ハイムの場合この色彩語は同様にポジティブ、ネガティブ双方の関連の中で使われているが、初期においてはほとんどポジティブに使用されていると言える。特にごく初期の自然への憧憬を内容とする詩における **blau** にはそれが言える。しかし後期になると、特にハイムの詩の最も特徴的な暗いヴィジョンに満ちた詩にはそのネガティブ性が卓越している。その中でも次の 4 例はネガティブ性が際立っている。

Wie ist dein Kehlkopf blau, draus ächzend fuhr 『Bist du nun tot... (君はもう死んで
るの・・・) (DS.I. S.79)

Und die Zunge blau hing aus dem Maule breit? 『Der Baum (木)』 (DS.I. S.81)

Die blauen Lider schatten sanft herab. 『Ophelia (オフェーリア)』 (DS.I. S.161)

Noch grunzend. Unsre Brust schon blau gefleckt, 『Die Morgue (死体公示所)』 (DS.I.
S.287)

4例とも「蒼ざめた」の意で使われているのが分かる。最初の例は瀕死者の喉頭の色、
次の例は首吊りの刑に処せられた者の舌のそれ、三番目の例は溺死したオフェーリアの
顔の色であり、最後の例は死体公示所の死体の胸の死斑のそれである。

これに対してトラークルの作品における blau は、上のハイムの例のように直接的に死に
結び付けた例は皆無である。ハイムの場合後期においてもポジティブな使用例が見られる
が、それらは多く過去のイメージ、あるいは未来のそれにおいてであり、これが逆に現在
の暗いネガティブな全体のイメージを更に際立たせる役割を果たしている。

Wir, Ikariden, die mit weißer Schwinge

Im blauen Sturm des Lichtes einst gebraust, 『Die Morgue (死体公示所)』 (DS.I. S.476)

Oder Libellen blau auf den See-Anemonen

Zittern am Mittag in schweigender Wasser Bucht? (a.a.O. S.478)

次に共感覚についてであるが、トラークルの場合、詩人が生来的に共感覚の持ち主であ
ったかどうかは詳らかにしないが、共感覚的表現は少なからず見られる。

Der blaue Ton der Flöte im Haselgebüsch – sehr leise. 『Am Rand eines alten Brunnens
(古い泉辺)』 (HKA.I. S.308)

Ein rosiger Mensch. Trunken von bläulicher Witterung 『Anif (アニフ)』 (HKA.I.
S.114)

前者はフルートの響きが青く感じられ、後者は臭いが青く感じられるわけである。これに
対してハイムの blau の場合、共感覚表現は2例しか見られない。

Der blauen Winde weit in dem Azur.

Und tiefen Abends dunkelblaues Tönen, 『Die toten Könige (死せる王たち)』 (DS.I. S.345)

表面上は共感覚表現に見えるが、純然たるそれとは言えない表現がトラークルの詩には散見する。

Das blaue Lachen des Quells 『Offenbarung und Untergang (啓示と没落)』 (HKA.I. S.168)

Die blaue Klage des Wildbachs (a.a.O. S.169)

前者は、Das Lachen des blauen Quells、後者は Die Klage des blauen Wildbachs の書き換えである。この技巧的な表現方法をシュナイダー (Schneider) は Auseinanderrücken (引き離し) と Zwischenschaltung (挿入接続) と言っている(注)。こうした例はハイムの場合皆無である。

トラークルの場合、2例見られる blaue Stille(HKA.I. S.85, S.105)は擬似的な共感覚と言える。静寂は音ではないが、音に関わるカテゴリーに入るからである。同じ表現 blaue Stille がハイムの場合一つ、それも最後の詩に見える。

Und in der Bahnhöfe blauer Stille 『ため息 (Seufzer)』 (DS.I. S.516)

最後にハイムの注目すべき表現を幾つか示すと

Und unsrer Schlangenadern blaues Gift 『Die Irren (狂った者たち)』 (DS.I. S.262)

blau はここでは本来 Schlangenadern に係るべきものであるが、Gift に冠せられている。

Hören noch immer deinen Sang, o Meer

Wenn unter deines Gottes blauem Zürnen 『An das Meer (海に捧ぐ)』 (DS.I. S.317)

色彩語 blau が抽象名詞に係る例であるが、これは海の神の怒りであるから「青い」と連想が働いた例であり、やや常識的である。このような例はハイムの詩に多い。色彩語の近くに本来それが所属している対象が示されているか、暗示されている。つまり blau が本来的に所属している対象から切り離されて他の対象に冠せられるわけである。

Der blaue Schnee liegt auf dem ebenen Land, 『Der Winter (冬)』 (DS.I. S.163)

一見非現実的表現であるが、青空が雪に映ると青っぽく見えるのは我々の体験するところである。これに比べればトラークルの schwarzer Schnee 『Im Dorf (村にて)』 (HKA.I. S.64) は大胆な衝撃的な表現である。

Und blauer Finsternis. Sein hohles Auge 『Savonarola (サボナローラ)』 (S.159)

同じ表現はトラークルにもある。

Schnee fiel, und blaue Finsternis erfüllte das Haus. 『Traum und Umnachtung (夢と錯乱)』 (HKA.I. S.149)

ハイムには極めて意図的な blau の使用例がある。

Die Straße Antoine ist blau und rot
Von Menschenmassen. Von den Stirnen loht
Der weiße Zorn. Die Fäuste sind geballt. 『Bastille (バステューユ)』 (DS.I. S.86)

blau は rot と weiß と共にフランス国旗の三色を構成し、この三行に配置されている。このような作為的とも見える使用法はトラークルには見られない。

特殊な例として blau が色彩語 (名詞) に係る表現がハイムに見られる。

Ein Tänzer tanzt im blauen Mittagsrot 『Der Tag (昼)』 (DS.I. S.147)

このような表現もトラークルの場合皆無ある。

終わりに

ドイツ文学においてはトラークルに次いで色彩語を、また blau を多用しているハイムであるが、blau に限って言えば、トラークルに比べて、その数量において少ないのみならず、その用法においても多様性の点で及ばない。すなわち具体的・現実的な例においても、また非現実的・抽象的な例においてもハイムは見劣りする。また深さの点でも浅いと言える。例えば blauer Seele のような精神的な結びつきの例はほとんどなく、さらにはメタファー化している ein blaues Wild のような象徴的表現は、ハイムの場合皆無である。逆に言えば

ハイムの blau の使用法と比較することによって、トラークルのその卓越性が浮き彫りにされた感がある。やはりトラークルは「青の詩人」と呼ばれるのは当をえていると言えるだろう。

ハイムは blau に対してそれほど重きを置いていないのが分かる。一部の作品においてではあるが、後期のハイムの最も特徴が現れた代表作品群であるデモーニッシュな否定的諸力(negative Mächte)を形象化した、例えば『Krieg (戦争) I』や『Dämonen der Städte (都会の魔神たち)』等では、むしろ色彩のネガティブの値が最も高い schwarz を効果的に多用している(色彩形容詞が前者は schwarz 4、weiß、blau、rot、gelb 各 1、後者は schwarz 6、rot 3、gelb、weiß 各 1 の構成となっている)。

これらの詩群に限って言えば、ハイムは「黒の詩人」と言えるだろう。したがってハインツ・ピオンテーク(Heinz Piontek)がハイムの文学を「黒いポエジー」といみじくも呼んでいるのは肯けるものがある。

テキスト

1. DS = Heym, Georg : Dichtungen und Schriften. Gesammelte Ausgabe. Hrsg.von Karl Ludwig Schneider und Gunter Martens. Hamburg und München. Bd.I. Lyrik.1964. Bd.III. Tagebücher. 1960.
2. Heym, Georg : Gedichte 1910–1912. Historisch-kritische Ausgabe aller Texte in genetischer Darstellung. Hrsg. von Günter Dammann, Gunter Martens, Karl Ludwig Schneider. Max Niemeyer Verlag. Tübingen. 1993.
3. HKA=Trakl, Georg : Dichtungen und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe. Ergänzte Ausgabe. Hrsg. von Walther Killy und Hans Szekler. Bd.I. Otto Müller Verlag. Salzburg. 1987.
4. Trakl, Georg : Sämtliche Werke und Briefwechsel. Historisch-kritische Ausgabe mit Faksimiles der handschriftlichen Texte Trakls. Hrsg. Von Eberhard Sauer mann und Hermann Zwerschina. Roter Stern Verlag. Stroemfeld. Bd.I. Bd.II.1995. Bd.III. 1998. Bd.I.V1. Bd.IV.2. 2000.

用語索引

1. Brown, Russel E. : Index zu Georg Heym. Gedichte 1910–1912. Athenäum Verlag. Frankfurt am Main. 1970.

2. Wetzel, Heinz : Konkordanz zu den Dichtungen Georg Trakls. Otto Müller Verlag. Salzburg. 1971.

(註) Schneider, Karl Ludwig : Der bildhafte Ausdruck in den Dichtungen Georg Hayms, Georg Trakls und Ernst Stadlers. Carl Winter-Universitätsverlag. 1968. S.131.

参考文献

1. Goldmann, Heinrich : Katabasis. Eine tiefenpsychologische Studie zur Symbolik der Dichtungen Georg Trakls. Otto Müller Verlag. Salzburg. 1957.
2. Korte, Hermann : Georg Heym. J.B.Metzlersche Verlagsbuchhandlung und Carl Ernst Poeschel Verlag. Stuttgart. 1982.
3. Laue, Claus Ludwig : Das Symbolische und die Farbensymbolik bei Georg Trakl. Diss. Freiburg.1949.
4. Mautz, Kurt : Die Farbensprache des expressionistischen Lyrik. In : DVjs 31(1957). 198—240.
5. Mautz, Kurt : Georg Heym. Mythologie und Gesellschaft im Expressionismus. Athenäum Verlag. Frankfurt am Main. 1987.
6. Philipp,Eckhard : Die Funktion des Wortes in den Gedichten Georg Trakls. Linguistische Aspekte ihrer Interpretation. Max Niemeyer Verlag. Tübingen. 1971.
7. Saas, Christa : Georg Trakl. J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung und Carl Ernst Poeschel Verlag. Stuttgart.1974.
8. Salter, Ronald : Georg Heyms Lyrik. Ein Vergleich von Wortkunst und Bildkunst. Wilhelm Fink Verlag. München. 1972.
9. Schünemann, Peter : Georg Heym. Morgenbuch Verlag. Berlin. 1993.

トラークルとヘルダーリン・・・比喻の描法による比較

(トラークル協会 2007 年度春季研究発表会 発表要旨)

保坂 直之

【1】トラークルによるヘルダーリン受容について。先行研究に取り上げられた問題点を次のように整理した。

- 1 語彙、文体の類似性を取り上げる研究 (Bartsch, Böschenstein)
- 2 ヘルダーリンに 20 世紀初頭・表現主義の時代と同質のモチーフがある、という考察 (Böschenstein)
- 3 ニーチェ、イエスとの類似 (Methlagl, Doppler, Lachmann)
- 4 「狂詩人ヘルダーリン」への共鳴 (最後期の詩と同じ響き、リズムである、などの指摘) (Bartsch)

トラークル自身によるヘルダーリンからの影響をほのめかす記録などはない。受容時期なども、トラークルの詩作品の文体の変化などを検証して、類推する以外にない。

Fiedler の研究では以下の二つの時期が指摘されている。

- 第 1 期ヘルダーリン受容：『1909 年集』に取り組んでいた時期。ランボーなどとともに読んだ形跡がある。
- 第 2 期ヘルダーリン受容：1913 年末から 1914 前半にかけて。この時期に成立した作品には、詩のリズム、文体などで後期讃歌の影響が認められる。

【2】具体的な作品として以下の詩を取り上げる。

(1) 第 2 期ヘルダーリン受容以前のトラークルの詩：「Ein Winterabend」：

Tisch bereit, Brot und Wein などの語、モチーフがヘルダーリンの後期作品群を連想させるという指摘がある。だが、古代風リズムの自由韻律詩の詩体ではないので、「第 2 期受容以前」とした。

(2) 第 2 期ヘルダーリン受容後のトラークルの詩：「Abendland (4.Fassung, 3.Str.)」：

第 4 稿は 1914 年 6 月に版元に送られたもので、Ihr での呼びかけの連続、自由韻律の短い詩行と長い詩行の組み合わせのリズム、エレギーを思わせるヘクサメーターの詩行断片などがヘルダーリンの後期讃歌に酷似している。Städte という複数形 Ebene などの共通の語彙からも、ヘルダーリンの「Lebensalter」がこの詩の下敷きになっていることは明らかだと Böschenstein が指摘。しかし位相の違う二つの構成要素を併置するヘルダーリンの喩法と異なることも目立つ。

(3) トラークルの『Ein Winterabend』に似たヘルダーリンの詩：「Lebensalter」：「夜の歌 (Nachtgesänge)」という短い作品群の一つで、Ihr を使った呼びかけを古代の都市にしている詩の立ち上がりはトラークルの「Abendland」と同じ。古代と現代を対比の関係に置き、神殿廃墟の列柱を「森 (Wälder)」になぞらえる。建造物を自然の景物に見立てながら、古代と現代、廃墟と自然という、二つの構成要素の比較の視点が明らかである。

【3】 ヘルダーリンの詩に見られる比喩表現の特徴は、例えば古代の廃墟のさまと現代社会を対比させる二項対比の視点が明らかである。そのため、自然描写は理想世界につながるアナロジー的な意味をおびることになる。だが、後期讃歌の文体を取り入れたかにも見えるトラークルの詩には、二項対比的な視点からの直喩、隠喩は見られない。主意、比喩イメージという二つの構成要素の明らかでない比喩によって、背景的な意味のない風景、つまり奥行きのない風景が生ずる印象である。文体や語彙、危機の時代の気配など、多くの類似点があるにもかかわらず、比喩の描法を見る限り両者の詩は大きく異なっている。

2008 年度活動報告

1. 6月14日(土) 2008年度春季総会・研究発表会が豊島区勤労福祉会館で開催される。

総会

(1) 本会の2007年度の決算が承認された。(別掲)

(2) 「トラークル研究」第五号は10月1日の発行を目途に編集する。

(3) 2008年度秋季総会・研究発表会

日時は、岡山大学で開催される日本独文学会にあわせて10月12日(日)を、会場は、近辺の施設を予定

(4) 会員募集

会員の通減化対策として本会のホームページを開設する。

(5) その他

1) インスブルック版が完結したことに伴い、その編集方針を検討する必要があるのではないかという提言がなされた。

2) 本会の事務を担当している三枝が定年を迎えることにより、事務局の移転が論議された。

研究発表会

1. 高橋 喜郎：ボードレールの『悪の華』における青とトラークルの青
2. 三枝 絃一：ハイムとトラークル — 詩における blau の比較

トラークル協会 2007 年度決算報告			
自 2007 年 4 月 1 日 至 2008 年 3 月 31 日			
収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年度繰越金	1 6 0 1 9 3	会場費 (ホテル・アウイーナ)	6 5 8 3
本年度会費	3 4 0 0 0	切手代	8 3 6 0
		領収書用紙	1 6 8
		「トラークル研究」第四号印刷代	1 3 5 0 0
		書留郵便封筒代	2 0
		書留郵便料	5 2 0
		本年度支出合計	2 9 1 5 1
		次年度へ繰越	1 6 5 0 4 2
		(内、本年度剰余金	4 8 4 9)
合 計	1 9 4 1 9 3	合 計	1 9 4 1 9 3

2. 9月5日(金)に2008年度第一回幹事会が開催される。
3. 10月12日(日)に2008年度秋季総会・研究発表会が岡山市勤労福祉センターで開催される。

総会

- (1) 「トラークル研究」第五号
10月中旬に発行予定
- (2) 2009年度春季総会・研究発表会
日時は、明治大学駿河台校舎で開催される日本独文学会に合わせて5月30日(土)、会場は近辺の公共施設を予定
- (3) 「トラークル研究」第六号
2009年10月1日発行予定
- (4) 2009年度秋季総会・研究発表会
名古屋市立大学で開催される日本独文学会に合わせて、日時と会場を決定する。
- (5) 会員の三枝絃一の定年により日本大学松戸歯学部になされていた本会の事

務局を三枝の自宅に2009年4月1日に移転する。

事務局の新アドレス 〒270-0122 千葉県流山市大畔237-3

電話 04-7150-5782

研究発表会

植和田光晴：花の色 ―芭蕉・蕪村とリルケ・トラークル―

伊藤 卓立：トラークルと東山魁夷 ―青について―

会員消息

退会者：川添悦男

お知らせ

1. 2010年度春季研究発表会の発表者を募集しています。ご希望の方は、2010年の2月末日までに論題をお知らせ下さい。
2. 『トラークル研究』第七号に論文等を発表されたい方は2010年2月末日までにお知らせ下さい。
3. 会費未納の方はご納入のほどよろしく申し上げます。

編集後記

本号の発行がだいぶ遅れました。お詫び申し上げます。

本会の目的の一つにトラークル文学の普及がありますが、一般に文学の普及はなかなか思うようには行かないのが実情です。その一つの理由として、しばらく前からの傾向ですが、研究者が一般向けの文学や詩人の入門的な、啓蒙的な書を書かなくなったことがあります。それはこうしたものを書いても業績にはならないからです。文学についての研究書は相変わらず刊行されていますが、しかし一般の方は研究書には手を出しにくく、ほとんど読まれません。したがってその文学に近づき親しむ機会があまりないわけです。その意味で文学を平易に解説し、その魅力を呈示する書の刊行の要があるのではないのでしょうか。トラークル文学についてもそうした類の書が発刊されれば一般にも少しは普及していくのではないのでしょうか。

(さ)